

令和4年8月講評

西躰 かずよし

月光
ダンサーの
しなりの
無音

長谷川柊香 宮城県

表現されるのは無音そのもの。かなしみそのものを描くのが難しいように、そのもの自体を描くのは難しい。無音とは正反対ともいえる動的なダンサーの動きを描くことで、その世界を捉えようとしている。

綿菓子みたいな雲が風に乗るよ。

来栖 優 宮城県

言葉の取り合わせの新しさといったようなものはない。それでもこの作品になつかしさを覚えるのは、かつてこうした呟きを手にしたことがあるからかもしれない。

都会にいても
夜は森から風が吹いてきて
上手にわたしを孤独にする

春町 美月 大阪府

森と都会と自身の孤独との対比がうつくしい。その対比のなかの静謐な緊張。『上手にわたしを孤独にする』という呟きからは、とうめいな悲しみが伝わる。

タツノオトシゴのような

線香のとおりみち

茶和鈴 東京都

『線香のとおりみち』というのはその煙の行方を示唆しているかのようなのである。煙はたつのおとしごのようなとおりみちを抜けて、この世界ではないどこかとおくの場所へと辿りつくのかもしれない。

祝日のロータリーひとさし指を
葉のかわりにして立ち尽くす

松下 誠一 東京都

立ち尽くすというのは強いことばは、『祝日のロータリー』や『ひとさし指を葉のかわりに』するといった具体的な描写を経て説得力のあるものになる。その場に立ち尽くさざるを得なかった主人公の物語とはどのようなものだったのだろう。

こびいあんどペーすと
こびいあんどペーすと
月は
しだいに
小さくなった

折田 日々希 神奈川県

コピーをくりかえして小さくなっていく月。自身をすり減らしながらコピーを続ける様子がどこかせつない。

七月のそれは大事なメロンパン

中矢 温 東京都

『それは大事な』という強調がメロンパンの向うにある個人的な物語を想起させる。こうした方法は作者のほかの作品にも見られる。例えば『花火を隠す大きな老人ホーム群』とい

う作品では、『大きな』という強調によって、老人ホーム群の背景にある物語が浮かびあがる。

蜉蝣の影を踏んだら星になる

小林紅石 埼玉県

影を踏めば、星になるというのは呪術めいていて、おまじないのようにも思える。星になること。それは影を踏まざるを得ないものにとっての救いなのだろうか。

お母さん朝顔咲いたから起きて

奎いう子 佐賀県

伝えたいことが口いっぱいに広がってあふれ出る。この作品は、そうしたことばの一つを思い出させてくれる。

クルトガを分解してて夏終わる

山本先生 東京都

シャープペンシルを分解してて終わる夏は、ただそれだけのものではあるけれども、その行為をつうじて本当にしたかったことを想起するからこそ、後悔もまた生まれるのだろう。

あやまって

ほたるぶくろをでてしまう

吉沢 美香 宮城県

ほたるぶくろは羊水のなかの安心を思わせる。あやまってでてしまう、という一節は生まれることのさびしさを言い当てているかのようである。

お守りがくすぐったいポケット

こはくいろ 大阪府

お守りをもらってもなんとも複雑な気持ちになるのは、それを渡すものの願いを顕著に映し出すものだからだろう。『くすぐったい』ということばは、そんな複雑な気持ちを上手く表現している。

貴族になりたい。

晩夏です。

Im 沖縄県

ウイスキーの CM に出てきそうなくらいに洒落ている。ここで一杯。あなたも一杯。という風に。

ずしーんずしーんと夏が歩く

水木貴奈子 神奈川県

夏はまた、山をこえて、川をこえて歩いていくのだろうか。『ずしーんずしーん』とという足音が猛暑の印象を読者に与える。

くすくすと日日草の座談会

藤 雪陽 長野県

日日草の座談会があれば私もそのなかに入ってみたい。そんな気にさせられる。作者のやさしいまなざしを感じることが出来る作品。